

『万葉集』のトモとドモ

間 宮 厚 司

足槍乃 あしはしら 山者百重 やまはもも

一云

① 雖隱 いかに 妹者不忘 いとはずれじ 直相左右二 ただあまなまに
② 雖隱 いかに 君乎思苦 きみをももけり 止時毛無 とどまもなし

これは『万葉集』の三一八九番歌であるが、本文と一云とで同じ「雖隱」表記を①カクストモ、②カクセドモのように諸注は訓み分けている。この場合、「雖」字の訓は一体どういう判断基準で、逆接仮定のトモあるいは逆接確定のドモに決定されるのだろうか。

本稿は『万葉集』を資料とし、接統助詞のトモとドモについて考察するが、ここでは紙幅の都合上、短歌の例のみを対象として扱う。なお、ドモと同様に、逆接確定条件を表わす接統助詞のドについても、当然言及すべきだが、それは別の機会に譲りたい。

それでは、最初に調査の方法と分析の仕方について、説明しておこう。まず、用例の収集を行なうに当たり、テキストは岩波書店の大系本『万葉集』と小学館の全集本『万葉集』を使用した。次に、大系本と全集本とで、トモとドモに関して、それぞれ共通の訓みをする歌例を全て集め、それらをトモとドモが呼応する語ごとに分類する。そして、そこに一定の法則を見出す。その結果に基づき、大系本と全集本とで共通する訓みの中で、問題と思われる歌例の検討をする。

本稿の最終的な目標は、トモとドモが、いかなる語と呼応しているのか、という形式面を徹底重視させることで、ある種の法則性を導き出すところにある。

はじめに、大系本『万葉集』と全集本『万葉集』で、
接続助詞トモとして訓みの一致する例を、呼応する語別
にすべて分類し、列挙する。なお、訓み下しの本文は、
全集本によった(ただし、ルビは省略した)。

③トモ↓メ(ヤモ)へ反語↓計四三例

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめ

やも(万葉一・三二)

沖つ波辺波立つとも我が背子がみ舟の泊まり波立た

めやも(万葉三・二四七)

岩が根のごしき山を越えかねて音には泣くとも色

に出でめやも(万葉三・三〇一)

価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめや

も(万葉三・三四五)

夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあにしかめ

やも(万葉三・三四六)

見えずとも誰恋ひざらめ山のはにいさよふ月を外に

見てしか(万葉三・三九三)

山守はけだしありとも我妹子が結びけむ標を人解か

めやも(万葉三・四〇二)

橘をやどに植ゑ生ほし立ちて居て後に悔ゆとも駿あ

らめやも(万葉三・四一〇)

我が命の全けむ限り忘れめやいや日に異には思ひま
すとも(万葉四・五九五)

石上降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてし

ものを(万葉四・六六四)

まを鏡磨ぎし心を許してば後に言ふとも駿あらめや

も(万葉四・六七三)

言問はぬ木にもありとも我が背子が手馴れのみ琴地

に置かめやも(万葉五・八一二)

我が盛りいたくたちぬ雲に飛ぶ薬食むともまたを

ちめやも(万葉五・八四七)

万代に見とも飽かめやみ吉野の激つ河内の大宮所

(万葉六・九二一)

行き巡り見とも飽かめや名寸隅の舟瀬の浜にしきる

白波(万葉六・九三七)

奥山の真木の葉しのぎ降る雪のふりはますとも地に

落ちめやも(万葉六・一〇一〇)

沖つ波辺つ藻巻き持ち寄せ来とも君にまされる玉寄

せめやも(万葉七・一二〇六)

大舟に握しもあらなむ君なしに潜させめやも波立た

ずとも(万葉七・一二五四)

水隠りに息づき余り速川の瀬には立つとも人に言は

めやも(万葉七・一三八四)

皆人の待ちし卯の花散りぬとも鳴くほととぎす我忘
れめや (万葉八・一四八二)

秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出
でめやも (万葉八・一五九五)

男神に雲立ち登りしぐれ降り濡れ通るとも我帰らめ
や (万葉九・一七六〇)

秋山に霜降り覆ひ木の葉散り年は行くとも我忘れめ
や (万葉一〇・二二四三)

天雲の寄り合ひ遠み逢はずとも異し手枕我まかめや
も (万葉一一・二四五二)

まそ鏡見とも言はめや玉かぎる磐垣淵の隠りたる妻
(万葉一一・二五〇九)

隠りには恋ひて死ぬともみ園生の韓藍の花の色に出
でめやも (万葉一一・二七八四)

葦鴨のすだく池水溢るとも設溝の方に我越えめやも
(万葉一一・二八三三)

逢はずして恋ひ渡るとも忘れめやいや日に異には思
ひ増すとも (万葉一二・二八八二)

今よりは恋ふとも妹に逢はめやも床の辺去らず夢に
見えこそ (万葉一二・二九五七)

百に千に人は言ふとも月草のうつろふ心我待ためや
も (万葉一二・三〇五九)

今更に恋ふとも君に逢はめやも寝る夜を落ちず夢に
見えこそ (万葉一三・三二八三)

には鳥の葛飾早稲をにへすともそのかなしきを外に
立てめやも (万葉一四・三三八六)

麻苧らを麻笥にふすさに續まずとも明日着せさめや
いざせ小床に (万葉一四・三四八四)

ま幸くて妹が斎はば沖つ波千重に立つとも障りあら
めやも (万葉一五・三五八三)

大舟に小舟引き添へ潜くとも志賀の荒雄に潜き逢は
めやも (万葉一六・三八六九)

紅に染めてし衣雨降りてにはほひはずともうつろはめ
やも (万葉一六・三八七七)

ほととぎす今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも駿
あらめやも (万葉一八・四〇五二)

春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越え来ざ
らめや (万葉一九・四一四五)

打ち羽振き鶏は鳴くともかくばかり降り敷く雪に君
いまさめやも (万葉一九・四二二三)

我が背子がやどのなでしこ散らめやもいや初花に咲
きは増すとも (万葉二〇・四四五〇)

には鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめや
も (万葉二〇・四四五八)

あしひきの八つ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植

ゑてける君(万葉二〇・四四八)

高円の峰の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘

れめや(万葉二〇・四五〇七)

⑤ トモ ↓ ム ↑ 推量 ↓ 計四二例

わたつみの沖に持ち行きて放つともうれむそこれの

よみがへりなむ(万葉三・三二七)

この世には人言繁し来む世にも逢はむ我が背子今な

らずとも(万葉四・五四一)

海の底奥を深めて我が思へる君には逢はむ年は経ぬ

とも(万葉四・六七六)

愛しと我が思ふ心早川の塞きに塞くともなほや崩え

なむ(万葉四・六八七)

一瀬には千度障らひ行く水の後にも逢はむ今にあら

ずとも(万葉四・六九九)

かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢

はむ君(万葉四・七三七)

朝夕に見む時さへや我妹子が見とも見ぬごとなほ恋

しけむ(万葉四・七四五)

松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ

(万葉五・八六〇)

かにかくに人は言ふとも織り継がむ我が機物の白き

麻衣(万葉七・一二九八)

月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬと

も(万葉七・一三五一)

大舟にま梶しじ貫き漕ぎ出なば沖は深けむ潮は干ぬ

とも(万葉七・一三八六)

春さればもずのかやぐき見えずとも我は見遣らむ君

があたりをば(万葉一〇・一八九七)

よそのみに見つつ恋ひなむ紅の末摘む花の色に出で

ずとも(万葉一〇・一九九三)

天の川夜舟を漕ぎて明けぬとも逢はむと思ふ夜袖交

へずあらむ(万葉一〇・二〇二〇)

天の川打橋渡せ妹が家道止まず通はむ時待たずとも

(万葉一〇・二〇五六)

天の川波は立つとも我が舟はいざ漕ぎ出でむ夜のふ

けぬ間に(万葉一〇・二〇五九)

鴨川の後瀬静けく後も逢はむ妹には我は今ならずと

も(万葉一一・二四三一)

鳴る神のしましとよもし降らずとも我は留まらむ妹

し留めば(万葉一一・二五一四)

人言の繁き間守りて逢ふともやなほ我が上に言の繁

けむ(万葉一一・二五六一)

朝露の消易き我が身老いぬともまたをち反り君をし

待たむ (万葉一・二六八九)

人言はまこと言痛くなりぬともそこに障らむ我にあらなくに (万葉一二・二八八六)

高瀬なる能登瀬の川の後も逢はむ妹には我は今にあ

らずとも (万葉一二・三〇一八)

君があたり見つつも居らむ生駒山雲なたなびき雨は

降るとも (万葉一二・三〇三二)

露霜の消易き我が身老いぬともまたをち反り君をし

待たむ (万葉一二・三〇四三)

雲居なる海山越えてい行きなば我は恋ひむな後は相

寝とも (万葉一二・三一九〇)

みさご居る渚に居る舟の漕ぎ出なばうら恋しけむ後

は相寝とも (万葉一二・三三二〇)

よしゑやし死なむよ我妹生けりともかくのみこそ我

が恋ひ渡りなめ (万葉一三・三二九八)

馬買はば妹徒歩ならむよしゑやし石は踏むとも我は

二人行かむ (万葉一三・三三一七)

門に居し郎子宇智に至るともいたくし恋ひば今帰り

来む (万葉一三・三三二二)

上野佐野の莖立折りはやし我は待たむゑ今年来ずと

も (万葉一四・三四〇六)

東道の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相

寝とも (万葉一四・三四七七)

遅速も君をし待たむ向つ蜂の椎のさ枝の時は過ぐとも (万葉一四・三四九三の或本歌曰)

大野道は繁道茂路繁くとも君し通はば道は広けむ

(万葉一六・三八八一)

梅の花み山としみにありともやかくのみ君は見れど

飽かにせむ (万葉一七・三九〇二)

ほととぎす夜声なつかし網ささば花は過ぐとも離れ

ずか鳴かむ (万葉一七・三九一七)

うぐひすの鳴くくら谷にうちはめて焼けは死ぬとも

君をし待たむ (万葉一七・三九四一)

行くへなくあり渡るともほととぎす鳴きし渡らばか

くやしのはむ (万葉一八・四〇九〇)

我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずと

も稔は栄えむ (万葉一八・四一二四)

天の川橋渡らせばその上ゆもい渡らさむを秋にあら

ずとも (万葉一八・四一二六)

住吉に斎く祝が神言と行くとも来とも舟は早けむ

(万葉一九・四二四三)

父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ

(万葉二〇・四三二五)

君が家の池の白波磯に寄せししば見とも飽かむ君

かも (万葉二〇・四五〇三)

◎トモ↓ジへ打消推量↓計二八例

大伴の見つとは言はじあかねさし照れる月夜に直に逢へりとも (万葉四・五六五)

我が背子が形見の衣妻問ひに我が身は放けじ言問はずとも (万葉四・六三七)

百歳に老い舌出でてよよむとも我はいとはじ恋は益すとも (万葉四・七六四)

百千度恋ふと言ふとも諸弟らが練りの言葉は我は頼まじ (万葉四・七七四)

鳥廻すと磯に見し花風吹きて波は寄すとも取らずは止まじ (万葉七・一一一七)

ちはやぶる金の岬を過ぎぬとも我は忘れじ志賀の皇神 (万葉七・一二三〇)

海の底沈く白玉風吹きて海は荒るとも取らずは止まじ (万葉七・一三一七)

さ雄鹿の妻呼ぶ山の岡辺なる早稲田は刈らじ霜は降るとも (万葉一〇・二二二〇)

臥いまるび恋ひは死ぬともいちしろく色には出でじ朝顔が花 (万葉一〇・二二七四)

百續の舟隠り入る八占さし母は問ふともその名は告らじ (万葉一一・二四〇七)

荒磯越しほか行く波のほか心我は思はじ恋ひて死ぬとも (万葉一一・二四三四)

さ寝ぬ夜は千夜もありとも我が背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ (万葉一一・二五二八)

逢はずとも我は恨みじこの枕我と思ひてまきてさ寝ませ (万葉一一・二六二九)

まそ鏡直にし妹を相見ずは我が恋止まじ年は経ぬとも (万葉一一・二六三二)

待ちかねて内には入らじ白たへの我が衣手に露は置きぬとも (万葉一一・二六八八)

荒熊の住むといふ山の師齒迫山責めて問ふとも汝が名は告らじ (万葉一一・二六九六)

玉かぎる磐垣淵の隠りには伏して死ぬとも汝が名は告らじ (万葉一一・二七〇〇)

高山の岩本激ち行く水の音には立てじ恋て死ぬとも (万葉一一・二七一八)

紀伊の国の飽等の浜の忘れ貝我は忘れじ年は経ぬとも (万葉一一・二七九五)

ま日長く夢にも見えず絶えぬとも我が片恋は止む時もあらじ (万葉一一・二八一五)

恋といへば薄きことなり然れども我は忘れじ恋ひは死ぬとも (万葉一二・二九三九)

みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らじ
親は知るとも(万葉一二・三〇七七)

わたつみの沖に生ひたる繩のりの名はさね告らじ恋
は死ぬとも(万葉一二・三〇八〇)

あしひきの山は百重に隠すとも妹は忘れじ直に逢ふ
までに(万葉一二・三一八九)

左奈都良の岡に粟蒔きかなしきが駒は食ぐとも我は
そともはじ(万葉一四・三四五一)

我が袖は手本通りて濡れぬとも恋忘れ貝取らずは行
かじ(万葉一五・三七一一)

音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年
は経ぬとも(万葉一八・四〇三九)

我が妹子が惚ひにせよと付けし紐糸になるとも我は
解かじとよ(万葉二〇・四四〇五)

④ トモヨシへ許容・放任 ↓ 計二六例

人はよし思ひやむとも玉かずら影に見えつつ忘らえ
ぬかも(万葉二・一四九)

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬとも
よし(万葉五・八二一)

我がやどの梅咲きたりと告げ遣らば来と言ふに似た
り散りぬともよし(万葉六・一〇一一)

我が背子と二人し居らば山高み里には月は照らずと

もよし(万葉六・一〇三九)

織女の袖つぐ夕の暁は川瀬の鶴は鳴かずともよし
(万葉八・一五四五)

酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬと
もよし(万葉八・一六五六)

春山のあしびの花の悪しからぬ君にはしゑや寄そる
ともよし(万葉一〇・一九二六)

来て見べき人もあらなくに我家なる梅の初花散りぬ
ともよし(万葉一〇・二三二八)

霰降り遠つ大浦に寄する波よしも寄すとも憎くあら
なくに(万葉一一・二七二九)

* トモヨシへ許容・放任 の省略形

人皆は今長しとたけと言へど君が見し髪乱れたり
とも(万葉二・一二四)

我が名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば
惜しむこそ泣け(万葉四・七三二)

今しはし名の惜しけくも我はなし妹によりては千度
立つとも(万葉四・七三二)

家にありて母が取り見ば慰むる心はあらまし死なば
死ぬとも(万葉五・八八九)

佐伯山卯の花持ちしかなしきが手をし取りてば花は
散るとも(万葉七・一二五九)

奈良山をにははす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば散るとも (万葉八・一五八八)

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散とも (万葉八・一五八九)

引き攀ぢて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも (万葉八・一六四四)

我妹子が結びてし紐を解かめやも絶えば絶ゆとも直に逢ふまでに (万葉九・一七八九)

人言は夏野の草の繁くとも妹と我とし携はり寝ば (万葉一〇・一九八三)

たまきはる世までと定め頼みたる君によりては言繁くとも (万葉一一・二三九八)

息の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも (万葉一一・二七八八)

暁と鶏は鳴くなりよしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも (万葉一一・二八〇〇)

谷狭み峰辺に延へる玉かづら延へてしあらば年に来ずとも (万葉一二・三〇六七)

木綿畳田上山のさな葛ありさりてしも今ならずとも (万葉一二・三〇七〇)

足柄の和乎可鶏山のかづの木のをかづさねもかづさかずとも (万葉一四・三四三二)

秋萩ににはへる我が裳濡れぬとも君がみ舟の綱し取
りてば (万葉一五・三五六)

◎トモ↓ナ(…ソ)へ禁止↓計一四例
島の宮上の池なる放ち鳥荒びな行きそ君いませずと
も (万葉二・一七二)

雨降らば着むと思へる笠の山人にな着せそ濡れはひ
つとも (万葉三・三七四)

我が衣人にな着せそ網引する難波をとこの手には触
るとも (万葉四・五七七)

言ふことの恐き国そ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも
(万葉四・六八三)

残りたる雪に交じれる梅の花早くな散りそ雪は消ぬ
とも (万葉五・八四九)

楽浪の志賀津の海人は我なしに潜きはなせそ波立た
ずとも (万葉七・一二五三)

風交じり雪は降るとも実にならぬ我家の梅を花に散
らすな (万葉八・一四四五)

遠妻と手枕交へて寝たる夜は鶏がねな鳴き明けば明
けぬとも (万葉一〇・二〇二一)

年に装ふ我が舟漕がむ天の川風は吹くとも波立つな
ゆめ (万葉一〇・二〇五八)

思ひ出でて音には泣くともいちしろく人の知るべく

嘆かすなゆめ (万葉一・二六〇四)

埼玉の津に居る舟の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね (万葉一四・三三八〇)

人皆の言は絶ゆとも埴科の石井の手児が言な絶えそね (万葉一四・三三九八)

うつせみの八十言のへは繁くとも争ひかねて我を言なすな (万葉一四・三四五六)

海原を遠く渡りて年経とも児らが結べる紐解くなゆめ (万葉二〇・四三三四)

① トモ↓動詞・補助動詞・助動詞の命令形↓計一例
石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつ

つ居らむ (万葉七・一三五三)
あしひきの山田作る児秀でずとも縄だに延へよ守ると知るがね (万葉一〇・二二一九)

桜麻の麻生の下草露しあれば明かしてい行け母は知とも (万葉一一・二六八七)

卯の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴きとよめよ含みたりとも (万葉一八・四〇六六)

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜はふけぬとも (万葉一〇・二二五二)

みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らせ親は知るとも (万葉三・三六三)

玉垂の小簾の垂簾を行きかちに眠は寝さずとも君は通はせ (万葉一一・二五五六)

あしひきの山沢ゑぐを摘みに行かむ日だにも逢はせ母は責むとも (万葉一一・二七六〇)

海の底沖は恐し磯廻り漕ぎたみ行かせ月は経ぬとも (万葉一二・三一九九)

山川を中に隔りて遠くとも心を近く思ほせ我妹 (万葉一五・三七六四)

みさご居る磯廻に生ふるなのりその名は告らしてよ親は知るとも (万葉三・三六二)

⑧ (イケリ) トモ↓ナシ↓計五例
衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりと

もなし (万葉二・二二二)
まそ鏡見飽かぬ妹に逢はずして月の経ぬれば生けりと

ともなし (万葉一二・二九八〇)
忘れ草我が紐に付く時となく思ひ渡れば生けりと

なし (万葉一二・三〇六〇)
うつせみの人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりと

りともなし (万葉一二・三一〇七)
まそ鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君に後れて生けりと

りともなし (万葉一二・三一八五)
⑨ トモ↓ベシ (当然推量) ↓計五例

今は我は死なむよ我が背生けりとも我に寄るべしと
言ふといはなくに(万葉四・六八四)

言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴
ににあるべし(万葉五・八一)

万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡る
べし(万葉五・八三〇)

万代に携はり居て相見とも思ひ過ぐべき恋にあらな
く(万葉一〇・二〇二四)

平布の崎漕ぎたもとほりひねもすに見とも飽くべき
浦にあらなくに(万葉一八・四〇三七)

① トモ⇄コソへ希求⇄計四例

我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見
えこそ(万葉四・六一五)

妹があたり今そ我が行く目のみだに我に見えこそ言
問はずとも(万葉七・一一二一)

狭野方は実にならずとも花のみに咲きて見えこそ恋
のなぐさに(万葉一〇・一九二八)

思ふ児が衣摺らむにほひこそ島の榛原秋立たずと
も(万葉一〇・一九六五)

① トモ⇄マニマニへ随意⇄計四例

春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がま
にまに(万葉四・七九〇)

たまきはる我が山の上に立つ霞立つとも居とも君が
まにまに(万葉一〇・一九一二)

大舟の鱧にも船にも寄する波寄すとも我は君がまに
まに(万葉一一・二七四〇)

梓弓弓束巻き替へ中見さし更に引くとも君がまにま
に(万葉一一・二八三〇)

④ トモ⇄ズへ打消⇄計三例

黒木取り草も刈りつつ仕へめどいそしきわけと寝め
むともあらず(万葉四・七八〇)

千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき士とそ
思ふ(万葉六・九七二)

君なくはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛も取ら
むとも思はず(万葉九・一七七七)

① トモ⇄ナへ意志・勧誘⇄計三例

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛
くありとも(万葉二・一一四)

露霜に衣手濡れて今だにも妹がり行かな夜はふけぬ
とも(万葉九・二二五七)

高田の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずと
も(万葉二〇・四二九五)

④ トモ⇄マシへ反実仮想⇄計三例

我が背子し遂げむと言はば人言は繁くありとも出で

て逢はましを（万葉四・五三九）

宇治人の喩ひの網代我ならば今は寄らましこつみ来
ずとも（万葉七・一一三七）

遠妻し高にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来な

まし（万葉九・一七四六）

⑨ トモトモガモ（願望）↓計二例

玉藻刈る海人娘子ども見に行かむ舟楫もがも波高く

とも（万葉六・九三六）

よしゑやし直ならずともぬえ鳥のうら嘆け居りと告

げむ子もがも（万葉一〇・二〇三一）

⑩ トモトモ形容詞の終止形+モ↓計一例

さ雄鹿の伏すや草むら見えずとも兎ろが金門よ行か

くし良しも（万葉一四・三五三〇）

以上、トモと呼応する語について、⑨⑩まで分類を
試みた。ここでは実例を示すだけで、この結果がいかな
る意味を持つのか、そのことに關しては、「二」でドモ
と呼応する語を分類した後の「三」で、考察する。

⑪ 全集本『万葉集』は、一四九番歌の頭注で「トモは
逆接仮定条件で、普通は推量や意志・命令などで応じる
が、ここは、「忘らえぬかも」という断定的表現と応じ
ている。おそらくヨシとの呼応のため下へ続く力が弱ま
ったのであろう」と指摘する。従うべきである。

二

続いて、接統助詞ドモを分類する（用例の挙げ方等は
トモの場合と同様）。

⑫ ドモトモ形容詞↓計三六例

*ドモトモ形容詞の終止形（または語幹）

青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし我が

君（万葉三・三七七）

風早の美保の浦廻の白つつじ見れどもさぶしなき人

思へば（万葉三・四三四）

蒸し衾なごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒

しも（万葉四・五二四）

月草に衣色どり摺らめどもうつるふ色と言ふが苦し

さ（万葉七・一三三九）

み空行く月詠をとこ夕去らず日には見れども寄るよ

しもなし（万葉七・一三七二）

天の川いと川波は立たねどもさもらひかたし近きこ

の瀬を（万葉八・一五二四）

袖振らば見もかはしつべく近けども渡るすべなし秋

にしあらねば（万葉八・一五二五）

秋萩に恋尽くさじと思へどもしゑやあたらしましたも

逢はめやも（万葉一〇・二二二〇）

秋萩を散り過ぎぬべみ手折り持ち見れどもさぶし君

にしあらねば(万葉一〇・二二九〇)

あしひきの山のあらしは吹かねども君なき夕はかねて寒しも(万葉一〇・二三五〇)

何時はしも恋ひぬ時とはあらねども夕かたまけて恋はすべなし(万葉一一・二三七三)

まそ鏡手に取り持ちて朝な朝な見れども君は飽くともなし(万葉一一・二五〇二)

刈り薦の一重を敷きてさ寝れども君とし寝れば寒けくもなし(万葉一一・二五二〇)

紅の八入の衣朝な朝ななれはすれどもいやめづらしも(万葉一一・二六二三)

何時はなも恋ずありとはあらねどもうたてこのころ恋し繁しも(万葉一二・二八七七)

人言を繁み言痛み我が背子を目には見れども逢ふよしもなし(万葉一二・二九三八)

解き衣の思ひ乱れて恋ふれども何の故そと問ふ人もなし(万葉一二・二九六九)

大君の塩焼く海人の藤衣なれはすれどもいやめづらしも(万葉一二・二九七二)

あしひきの山は百重に隠せども君を思はく止む時もなし(万葉一二・三一八九の一云)

ひとり寝る夜を数へむと思へども恋の繁きに心ども

なし(万葉一三・三二七五)

栲衾白山風の寝なへども児ろがおそきのあるこそ良しも(万葉一四・三五〇九)

韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし(万葉一五・三六七〇)

秋の野をにははす萩は咲けれども見る験なし旅にあれば(万葉一五・三六七七)

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになほし見が欲し(万葉一八・四一一二)

旅衣八重着襲ねて寝ぬれどもなほ肌寒し妹にしあらねば(万葉二〇・四三五一)

*ドモ↓形容詞の連体形

一日には千重波敷きに思へどもなぞその玉の手に巻きかたき(万葉三・四〇九)

鶉鳴く故りにし郷ゆ思へどもなにそも妹に逢ふよしもなき(万葉四・七七五)

人ごとに折りかざしつづ遊べどもいやめづらしき梅の花かも(万葉五・八二八)

一昨日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも(万葉六・一〇一四)

時ならぬ斑の衣着欲しきか島の榛原時にあらねども(万葉七・一二六〇)

解き衣の思ひ乱れて恋ふれどもなぞ汝が故と問ふ人もなき(万葉一・二六二〇)

玉かづらかけぬ時なく恋ふれどもなにしか妹に逢ふ時もなき(万葉一二・二九九四)

向かひ居て一日も落ちず見しかども厭はぬ妹を月渡るまで(万葉一五・三七五六)

さ寝る夜は多くあれども物思はず安く寝る夜はさねなきものを(万葉一五・三七六〇)

家ろには葦火焚けども住み良けを筑紫に至りて恋しけ思はも(万葉二〇・四四一九)

*ドモ↓形容詞のミ語形

立ち反り泣けども我は験なみ思ひわぶれて寝る夜しそ多き(万葉一五・三七五九)

⑤ドモ↓ズへ打消↓計三一例

河上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は(万葉一・五六)

梓弓引かばまにまに寄らめども後の心を知りかてぬかも(万葉二・九八)

翼なすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ(万葉二・一四五)

青旗の木幡の上を通ふとは目には見れどもただに逢はぬかも(万葉二・一四八)

向かひ居て見れども飽かぬ我妹子に立ち離れ行かむたづき知らずも(万葉四・六六五)

梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり(万葉五・八三六)

大崎の神の小浜は狭けども百舟人も過ぐといはなくに(万葉六・一〇二三)

玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため(万葉七・一二二二)

朝なぎに来寄る白波見まく欲り我はすれども風こそ寄せね(万葉七・一三九一)

風雲は二つの岸に通へども我が遠妻の言を通はぬ(万葉八・一五二一)

手もすまに植ゑし萩にやかへりては見れども飽かず心尽くさむ(万葉八・一六三三)

立ちかはり月重なりて逢はねどもさね忘れえず面影にして(万葉九・一七九四)

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも(万葉一〇・一九五三)

立ちて居てたどきも知らず思へども妹に告げねば間使ひも来ず(万葉一一・二三八八)

あからひく肌も触れずて寝たれども心を異には我が思はなくに(万葉一一・二三九九)

垣ほなす人は言へども高麗錦紐解き開けし君ならなくに(万葉一・二四〇五)

家人は道もしみみに通へども我が待つ妹が使ひ来ぬかも(万葉一・二五二九)

心には千重にしくしく思へども使ひを遣らむすべの知らなく(万葉一・二五五二)

面忘れだにもえずやと手握りて打てども懲りず恋といふ奴(万葉一・二五七四)

神奈備にひもろき立てて齋へども人の心は守りあへぬもの(万葉一・二六五七)

杖つきもつかずも我は行かめども君が来まさむ道の知らなく(万葉一・三三一九)

韓衣裾のうちかへ逢はねども異しき心を我が思はなくに(万葉一・三四八二)

室草の都留の堤の成りぬがに児ろは言へどもいまだ寝なくに(万葉一・三五四三)

ひさかたの天照る月は見つれども我が思ふ妹に逢はぬころかも(万葉一・三六五〇)

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし(万葉一・四〇〇一)

神さぶる垂姫の崎漕ぎ巡り見れども飽かずいかに我せむ(万葉一・四〇四六)

ほととぎす聞けども飽かず網捕りに捕りてなつけな離れず鳴くがね(万葉一九・四一八二)

ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども我聞き継がず花は過ぎつつ(万葉一九・四一九四)

月日夜は過ぐは行けども母父が玉の姿は忘れせなふも(万葉二〇・四三七八)

我が背子がやどのなでしこ日並べて雨は降れども色も変わらず(万葉二〇・四四四二)

梅の花咲き散る春の長き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも(万葉二〇・四五〇二)

◎ドモ↓動詞(終止形・連体形・已然形)↓計一八例
*ドモ↑動詞の終止形

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る(万葉二・二二一)

去年見てし秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年離る(万葉二・二二四)

み吉野の滝の白波知らねども語りし継げば古思ほゆ(万葉三・三一一三)

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを(万葉三・三三九六)

今作る斑の衣面影に我に思はゆいまだ着ねども(万葉七・二二九六)

うぐひすの春になるらし春日山籠たなびく夜目に見
れども (万葉一〇・一八四五)

冬過ぎて春の来れば年月は新たなれども人は古り行
く (万葉一〇・一八八四)

ひぐらしは時と鳴けども恋ひしくにたわやめ我は定
まらず泣く (万葉一〇・一九八二)

*ドモ↓動詞の連体形

天雲のそくへの極み遠けども心し行けば恋ふるもの
かも (万葉四・五五三)

岩根踏む重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ恋ひ
渡るかも (万葉一一・二四二二)

春日山雲居隠りて遠けども家は思はず君をしそ思ふ
(万葉一一・二四五四)

夢にだになにかも見えぬ見ゆれども我かも迷ふ恋の
繁きに (万葉一一・二五九五)

二上に隠らふ月の惜しけども妹が手本を離るるこの
ころ (万葉一一・二六六八)

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ
思ふ (万葉二〇・四五〇〇)

*ドモ↓動詞の已然形

草枕旅には妻は率たれどもくしげの内の玉こそ思は
ゆれ (万葉四・六三五)

心には忘るる日なく思へども人の言こそ繁き君にあ
れ (万葉四・六四七)

天の川遠き渡りはなけれども君が舟出は年にこそ待
て (万葉一〇・二〇五五)

極まりて我も逢はむと思へども人の言こそ繁き君に
あれ (万葉一二・三一四)

@ドモ↓ケリへ気付き↓計一三例

ますらをや片恋せむと嘆けども醜のますらをなほ恋
ひにけり (万葉二・一一七)

夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手
にも触れねば (万葉四・七四一)

梅の花折りも折らずも見つれども今夜の花になほし
かずけり (万葉八・一六五二)

年のはに梅は咲けどもうつせみの世の人我し春なか
りけり (万葉一〇・一八五七)

相見らく飽き足らねどもいなめの明けさりにけり
舟出せむ妻 (万葉一〇・二〇二二)

降る雪の空に消ぬべく恋ふれども逢ふよしなしに月
を経にける (万葉一〇・二三三三)

世の中は常かくのみと思へどもかつて忘れずなほ恋
にけり (万葉一一・二三八三)

こもりくの泊瀬小国に妻しあれば石は踏めどもなほ

し来にけり(万葉一三・三三一)

筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ母い守れども魂そ
合ひにける(万葉一四・三三九三)

妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにそ
ありける(万葉一五・三五九一)

天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ来にけ
る(万葉一五・三六九八)

あしひきの山きへなりて遠けども心し行けば夢に見
えけり(万葉一七・三九八一)

うぐひすの声は過ぎぬと思へどもしみにし心なほ恋
ひにけり(万葉二〇・四四四五)

◎シカレドモ〔接続詞〕↓計九例

大和道は雲隠りたり然れども我が振る袖をなめしと
思ふな(万葉六・九六六)

大き海の波は恐し然れども神を斎ひて舟出せばいか
に(万葉七・一二三二)

我が待ちし秋は来りぬ然れども萩の花そもいまだ咲
かずける(万葉一〇・二二二三)

もみち葉のにはひは繁し然れども妻梨の木を手折り
かざさむ(万葉一〇・二一八八)

恋といへば薄きことなり然れども我は忘れじ恋は死
ぬとも(万葉一二・二九三九)

梓弓末はし知らず然れどもまさかは君に寄りにしも
のを(万葉一二・二九八五)

はるはるに思ほゆるかも然れども異しき心を我が思
はなくに(万葉一五・三五八八)

白玉の緒絶えはまこと然れどもその緒また貫き人持
ち去にけり(万葉一六・三八一五)

天離る鄙に月経ぬ然れども結びてし紐を解きも開け
なくに(万葉一七・三九四八)

①ドモツ、(カネ)ツへ完了)↓計九例

雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたもと
ほり来つ(万葉八・一五七四)

白たへの袖の別れは惜しけども思ひ乱れて許しつる
かも(万葉一二・三一八二)

佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか児ろが面に
見えつる(万葉一四・三四七三)

水泡なす仮れる身そとは知れれどもなほし願ひつ千
年の命を(万葉二〇・四四七〇)

常磐なすかくしもがもと思へども世の理なれば留み
かねつも(万葉五・八〇五)

世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥
にしあらねば(万葉五・八九三)

思へども思ひもかねつあしひきの山鳥の尾の長きこ

の夜を(万葉一・二八〇二)

海原を八十島隠り来ぬれども奈良の都は忘れかねつ
も(万葉十五・三六一三)

山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも
(万葉一五・三六一八)

㊦ドモ↕ヌへ完了↘↓計四例

泣沢の神社に神酒据ゑ折れども我が大君は高日知ら
しぬ(万葉・二・二〇二)

荒野らに里はあれども大君の敷きます時は都となり
ぬ(万葉六・九二九)

天の川瀬々に白波高けども直渡り来ぬ待たば苦しみ
(万葉一〇・二〇八五)

うつせみの常の言葉と思へども継ぎてし聞けば心迷
ひぬ(万葉一二・二九六一)

㊧ドモ↕ムへ推量↘↓計四例

な思ひと君は言へども逢はむ時いつと知りてか我が
恋ひざらむ(万葉二・一四〇)

夢にだに見えむと我はほどけども相し思はねばうべ
見えざらむ(万葉四・七七二)

近江の海沖つ白波知らねども妹がりといはば七日越
え来む(万葉一・二四三五)

在干瀉あり慰めて行かめども家なる妹いいふかしみ

せむ(万葉一二・三一六一)

㊩ドモ↕ナリへ断定↘↓計三例
たもとほり行箕の里に妹を置きて心空なり土は踏め
ども(万葉一一・二五四一)

立ちて居てたどきも知らず我が心天つ空なり地は踏
めども(万葉一二・二八八七)

㊪ドモ↕キへ直接経験過去↘↓計二例

我妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり地は踏めど
も(万葉一二・二九五〇)

㊫ドモ↕キへ直接経験過去↘↓計二例
梓弓末のたづきは知らねども心は君に寄りにしもの
を(万葉一二・二九八五の一本歌曰)

卷向の穴師の山に雲居つつ雨は降れども濡れつつそ
来し(万葉一二・三一二六)

㊬ドモ↕ゴトシへ比況↘↓計二例
このころの恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひしく
ごとし(万葉一〇・一九八四)

我が背子に我が恋ふらくは夏草の刈り除くれども生
ひしくごとし(万葉一一・二七六九)

㊭ドモ↕ソへ指定↘↓計二例

風高く辺には吹けども妹がため袖さへ濡れて刈れる
玉藻そ(万葉四・七八二)

伊香保嶺に雷な鳴りそね我が上には故はなけども児

らによりてそ(万葉一四・三四二一)

⑧ドモ⇄ラシへ根拠のある推量⇓計二例

宇治川を舟渡せをと呼ばへども聞こえずあらし梶の音もせず(万葉七・一一三八)

峰の上に降り置ける雪し風のむたここに散るらし春にはあれども(万葉一〇・一八三八)

⑨ドモ⇄リへ存続・完了⇓計二例

この小川霧を結べるたきち行く走井の上に言挙げせねども(万葉七・一一一三)

粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり(万葉七・一二〇七)

⑩ドモ⇄ケムへ過去推量⇓計一例

時々の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ(万葉二〇・四三二三)

⑪ドモ⇄ベシへ当然推量⇓計一例

紅に衣染めまく欲しけども着てにははばか人の知るべき(万葉七・一二九七)

⑫ドモ⇄ラムへ現在推量⇓計一例

今もかも大城の山にほととぎす鳴きとよむらむ我なけれども(万葉八・一四七四)

以上、ドモと呼応する語について、②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫まで実例を示し、分類を試みた。この結果の解釈は「三」で行なう。

なお、次の一首はドモと呼応する「あにくやしづし」が語義未詳のため、分類から除外した。

多胡の嶺に寄せ網延へて寄すれどもあにくやしづし
その顔良きに(万葉一四・三四一一)

三

ここで、「一」と「二」で分類した結果を一覧する。

●トモと呼応する語

①トモ⇄メ(ヤモ)へ反語⇓計四三例

②トモ⇄ムへ推量⇓計四二例

③トモ⇄ジへ打消推量⇓計二八例

④トモ⇄ヨシへ許容・放任⇓計二六例

⑤トモ⇄ナ(：ソ)へ禁止⇓計一四例

⑥トモ⇄動詞・補助動詞・助動詞の命令形⇓計一一例

⑦(イケリ)トモ⇄ナシ⇓計五例

⑧トモ⇄ベシへ当然推量⇓計五例

⑨トモ⇄コソへ希求⇓計四例

⑩トモ⇄マニマニへ随意⇓計四例

⑪トモ⇄ズへ打消⇓計三例

⑫トモ⇄ナへ意志・勧誘⇓計三例

⑬トモ⇄マシへ反実仮想⇓計三例

⑭トモ⇄モガモへ願望⇓計二例

○トモ⇩形容詞の終止形+モ⇩計一例

●ドモと呼応する語

Ⓐドモ⇩形容詞⇩計三六例

Ⓑドモ⇩ズ⇩打消⇩計三一例

Ⓒドモ⇩動詞(終止形・連体形・已然形)⇩計一八例

Ⓓドモ⇩ケリ⇩気付き⇩計一三例

Ⓔシカレドモ(接続詞)⇩計九例

Ⓕドモ⇩ツ、(カネ)ツ⇩完了⇩計九例

Ⓖドモ⇩又⇩完了⇩計四例

Ⓕドモ⇩ム⇩推量⇩計四例

Ⓖドモ⇩ナリ⇩断定⇩計三例

Ⓖドモ⇩キ⇩直接経験過去⇩計二例

Ⓕドモ⇩ゴトシ⇩比況⇩計二例

Ⓖドモ⇩ソ⇩指定⇩計二例

Ⓜドモ⇩ラシ⇩根拠のある推量⇩計二例

Ⓜドモ⇩リ⇩存続・完了⇩計二例

Ⓜドモ⇩ケム⇩過去推量⇩計一例

Ⓜドモ⇩ベシ⇩当然推量⇩計一例

Ⓜドモ⇩ラム⇩現在推量⇩計一例

右の結果から知られることを以下にまとめると、

原則として、トモとあった場合には、将来の事柄に

関係して表現する語が来ている。これは、トモが逆

接仮定条件を示すことと関係があると判断される。

それに対して、ドモの方は、原則として、現在および、それをさかのぼる時点の事柄に関係して表現する語が来ている。これは、ドモが逆接確定条件を示すことと、やはり無関係とは思われない。

となる。

ただし、動詞と形容詞については、多少の補足説明を行なう必要がある。つまり、トモの場合は、動詞の命令形と呼応しているが、命令表現とは将来こうあれと、未だ実現していない事態に関する言い方である。一方、ドモの場合は、動詞の命令形と呼応せず、終止形・連体形・已然形と呼応する。終止形は現代語では、「明日、学校に行く」のように未来のことも表わす。しかし、古典語の終止形は、既に指摘されているように現在を表わすことが多く、未来を表現した終止形の確かな例は、上代にはなかったと見てよい。また、これは終止形終止の場合だけではなく、係り結びによる連体形終止や已然形終止の場合も同様である。

さて、形容詞の場合だが、これは次に挙げる二首を例に考えてみよう。

Aさ雄鹿の伏すや草むら見えずとも兎るが金門よ行か
くし良しも(万葉一四・三五三〇)

B 袴袵白山風の寝なへども児ろがおそきのあるこそ良しむ (万葉一四・三五〇九)

これはAがトモ↓エシモ、Bがドモ↓エシモで、結びは(エシモの直前にシとコソがある点は異なるが)共通している。ただし、A B二首を口語訳すると、Aは「さ雄鹿の伏す草群のように見えなくても、あの娘の金門を行くのは良いだろうな」であり、Bは「白山風の寒さで寝られないけれども、あの娘の(くれた)着物があって良かったな」となる。すなわち、Aのエシモは未だ実現していないのに対して、Bのエシモは既に実現したことと言っているのである。この点は、現代語も古典語と同じで、「試験に合格すれば、嬉しい」の「嬉しい」は仮定表現であるが、「試験に合格したので、嬉しい」は確定表現である。したがって、慣用表現化しているトモ↓ヨシは「してもかまわない」の意で、仮定のことを言っているのであるから、トモと呼応したと考えられる。

次に、大系本と全集本とで、いずれもトモと訓むものうち、問題のあると思われる歌例を検討したい。

①黒木取り草も刈りつつ仕へめどいそしきわけと褒めむともあらず (万葉四・七八〇)

②千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき士と思ふ (万葉六・九七二)

③君なくはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛も取らむとも思はず (万葉九・一七七七)

右の①③は大系本と全集本に限らず、普通「トモ↓ズ」と訓まれているが、先の呼応の分類結果を踏まえるならば、ズへ打消は、この①②③を除き、全てドモと呼応しており、その点呼応の法則と矛盾する。そこで、

①将誓十方不有↓ホメムトモアラジ

②軍奈利友言挙不為↓イクサナリトモコトアゲセジ

③将取跡毛不念↓トラムトモ(オ)モハジ

のように、「トモ↓ジ」で訓むのは、どうであろう。その表記と訓み方の例証としては、次のものがある。

過納 吾者不忘 (万葉七・一二三〇)

貴而雖問 汝名者不告 (万葉一一・二九六九)

さて、今度は大系本と全集本で共にドモと訓むものうち、問題のあると思われる歌例を検討する。まずは、「ドモ↓ム」を取り上げ、一首ずつ個別に見てゆく。

な思ひと君は言へども逢はむ時いつと知りてか我が恋ひざらむ (万葉二・一四〇)

推量・意志の助動詞のムが、多くトモの方と呼応することは既に見た。だとすれば、これも原文表記は「君者雖言」なのだから、「キミハイフトモ」と訓んではどうであろう。むしろ、その方が妥当な訓みのように思う。

なぜならば、「言ふとも↓：む」という表現の歌例が、二例（七三七、一二九八）あるからである。一四〇番歌の場合、実際に「な思ひ」と言ったとしても、それを表現の上で仮定的に扱ったものと見ればよい。所謂、修辭的仮定法（既定の事実を仮定的にトモと表現する）の例と考えれば、特に支障もないであろう。

夢にだに見えむと我はほどけども相し思はねぼうべ
見えざらむ（万葉四・七七一）

右の歌については、全集本『万葉集』の頭注に「ウベは見えないことを当然に思う意の副詞で、推量の助動詞ムはむしろウベと結びついている」との解説があり、その通りと思う。もっとも、ホドケドモの原文は「保杼毛友」なので、別の訓は考えられない（中西進『万葉集』（講談社文庫）は、ここをホドモトモと訓むが、語義未詳としている）。

近江の海沖つ白波知らねども妹がりといはば七日越
え来む（万葉一一・二四三五）

この歌の第三句の原文表記は「雖不知」であるので、シラズトモの方がムとの呼応からは、相応しいように思われる。また、シラネドモと訓む全集本『万葉集』の口語訳が「知らなくても」となっているのはなぜなのか。なお、塙書房『万葉集』は、シラズトモと訓んでいる。

在千瀉あり慰めて行かめども家なる妹いいふかしみ
せむ（万葉一二・三一六一）

これはドモ↓ムの最後の例だが、第三句の原文表記は「行目友」で、ユカメドモ以外の訓は考えられない。そして、第五句は「将鬱悒」表記で、全集本『万葉集』はイフカシミセムと訓み、大系本『万葉集』はオボボシミセムと訓む違いはあるが、「将」字があるところから、いずれにしても「ム」と訓まざるを得ない。すると、この三一六一番歌は唯一、ドモがムと呼応した珍しい確かな例となる。では、次にドモ↓ベシの例を見る。

紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知る
べき（万葉七・一二九七）

既に見たように、トモ↓ベシの例は計五例あり、ベシは未来を予測した表現となるから、トモと呼応したものと判断される。一二九七番歌の場合、第三句は「雖欲」表記なので、ここはホシクトモと訓んで、「紅で衣を染めたたくても」の意で解釈すればよい。

以上、大系本と全集本とで共通する訓みのうち、問題のある歌例について私案を述べたが、呼応という形式面を重視し過ぎ、意味面を軽視したことは否めない。ただ、今回は形式的側面から、一定の法則を見出し、そこから問題点を指摘することをしたまでである。

本稿は大系本『万葉集』と全集本『万葉集』とを照合させ、共通してトモまたはドモと訓む例を呼応する語別に全て列挙し、分類した。その分類の仕方(どの語と呼んでいるか)については多少の異論も当然出て来ると思われる。しかし、未来についての表現とトモが呼応し、現在についての表現とドモが呼応するという大原則は「一」「二」で見た通り、動かないであろう。

また、今回はスペース的に触れることができなかったが、大系本『万葉集』と全集本『万葉集』とで、トモ・ドモの訓みの異なる歌も全体(短歌のみ)で一三【参考までに歌番号を示すならば、八九番、一三三番、六一〇番、六五八番、一二三八番、一三〇三番、一六八四番、一六九〇番、一八六〇番、二〇〇八番、二〇二六番、二三四五番、三三三一番】ある。この中の一三三番歌は、「小竹之葉者三山毛清尔乱友吾者妹思別来礼婆」という原文だが、大系本の訓みは、「小竹の葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別来ぬれば」であり、全集本の訓みは、「笹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別来ぬれば」である。第三句目の「乱友」の訓みは、「友」字をトモあるいはドモと訓むのかの問題だけではなく、「乱」字の訓み方も問題になる。かつて、筆者は

へ「小竹の葉はみ山もさやに乱友」(萬葉集一三三番)の訓釈について(「鶴見大学紀要」二五号、昭和六三年三月)で、「乱友」はサワケドモと訓むべきことを論じた。実はその拙稿の中でも、トモとドモがいかなる語と呼応しているかの調査を行なったが、そこでは万葉集の仮名書きの巻五・一四・一五・一七・一八・一九・二〇と、それ以外の巻でも、明らかにトモかドモかが決定でき、呼応する語の訓みも確定できる例に限るという厳しい条件のもとで分類・考察した。今回は大系本『万葉集』と全集本『万葉集』の二書を比較し利用することで、用例数を拡充したが、呼応の法則に変更を認める必要性は特別生じなかった。

なお、一三三番歌以外で、大系本と全集本とでトモ・ドモの訓み方の相違する一二の歌については、いざれ機会を改めて検討し直すつもりでいる。

最後に条件表現(トモとドモを含めた)を詳細に考察した論著として、次の二つは大変有益であるので、紹介しておく。

木下正俊『万葉集語法の研究』(塙書房)

山口堯二『古代接統法の研究』(明治書院)